

「いやはや、よく来てくれた。ギンスケ・ナツメだったかな？ それにその三毛猫キャリコ！ 改めて見ても、やはり堂々たる風格だ。素晴らしい」

満面に笑みを浮かべるメリーウエザーを前に、ワガハイが丸まるバスケットを抱えた銀助が、「はあ」と頬を引きつらせた。その背後では、アーサーとコナン、マリーの三人が、平然と並んでいる。

いま三人がいるのは、政財界の裏の大物、ジョン・メリーウエザーの屋敷。ステイブルトンの屋敷も立派なものだったが、こちらはさらなる豪邸だ。通されたのも、元はダンスホールだったと思われる豪華な広間である。天井も高く、二階部分が回廊になっていた。

ただ、その豪華な広間も、いまはずいぶん残念なことになっている。何しろ、装飾が施された壁や床の絨毯は傷だらけで、本来は高価だったのだろう調度品の多くも、少なからぬ損傷が見受けられるのだ。屋敷の主であるメリーウエザーは気にしていない様子だが、使用人たちが苦々しく思っているのは手に取るように伝わって来た。

そして、広間が「残念なこと」になった原因たちは、人間の思惑などどこ吹く風と、我が物顔で部屋中を跳梁していた。

数十匹の猫たち。

そのどれもが、主の台詞通り、美しい猫たちだった。

「まあしかし……猫は猫……だな」

メリーウエザーに聞こえないよう、コナンが小さくつぶやく。

好き好きに寝て、起きて、じゃれ合っている猫もいれば、喧嘩している猫もいる。イギリスには、猫は「家を守る母親」のイメージがあるのだが、生憎そんな連想は遙か彼方だった。

「今日は愛猫家同士親交を深めたいとのことだがーどうだね？ 儂の子供たちは？ 皆、素晴らしいだろう？」

「そ、そうですね。なんと言うか、眼福です。特にひとつの部屋の中に、こんなにたくさん猫がいるのは、壮観と申しますか……あはは……」

「血統を保つため、放し飼いには反対でな。と言って、狭い部屋に閉じ込めては、猫のためにならない。適度な運動は美の秘訣だ。老婆心と言うが、その点、君の三毛猫キャリコは些か運動不足ではないかね？」

「耳が痛いです。あはは……」

車椅子に座るメリーウエザーの相手を、銀助はぎくしゃくしながらもこなしていた。マリー

の情報では酷く気難しい人物という評判だったが、いまは見るからに上機嫌だ。

「まさか、猫をダシにするだけで、こんなに簡単に面談が叶うなんて……あのお爺ちゃん、本当にメリーウエザー本人なのかしら」

「おいおい。彼まで『人が変わった』なんて落ちじゃないだろうな。どうなんだ、アーサー？」

「いまの彼しか知らないのだから、比較しようがないだろう」

主の相手をする銀助の背後に並んだまま、コナンたちはこそそと会話を交わす。もつとも、屋敷に入る際にはボディィ・チェックも受けている。彼が「要人」なのは間違いなかった。

アーサーが、「それより……」と壁際に顔を向けた。

そちらには、屋敷の使用人数名が、静かに立って主の命令を待っている。中には、猫にまわりつかれて辟易している者もいたが、全員直立不動で無言のままだ。

「大変そう……ま、その分、お給金も良いんでしようけど」

「彼らがどうかしたのか？」

コナンが尋ねると、アーサーはしばらく沈黙したのち、

「ここに来る前に説明しただろ？ 最近、僕らの身の回りで起きた事件の共通点について」

アーサーの台詞に、コナンは真面目な顔で「ああ」と頷いた。

最近の事件の共通点。

それは、事件の関係者が、あるとき突然「人が変わった」ように性格が変化しているという点だ。

アイリーンの友人だったと言う、事件の被害者クロエ・ノートン。彼女は貧民街出身の娼婦だったが、ある時期から突然社交界に出没するようになった。

彼女を殺害した、ウィリアム・クラム。彼もコナンたちに追い詰められた際、突如異様な攻撃性を見せ、いま現在も正常な精神状態を取り戻していない。

そして、ステイプルトン家の当主だったロジャー・ステイプルトンは、ある時を境に明るく振る舞うようになり、同時に感情の起伏が激しく、暴力的になった。その屋敷に仕えていたメイドは、一時的に無口になり、なぜか気配を殺す仕草を取るようになっていた。

彼ら、彼女に見られる共通点に、どんな意味があるのか。アーサーは、現時点での断言を避けている。

ただ、先日ターナの身にまで似通った変化が起きた以上、無視することはできない。

そしてアーサーは、断言は避けつつも、こうした急激な人格の変化の原因としてもっとも考えられるのは、「何者かによる暗示」だと推測していた。

要するに、この五人は、第三者から思考や行動を操作、誘導されていた可能性が高いというのだ。

コナンは医学生の手づかした、何より「自らの目的」があったため、近年研究されている心理療法については、ひと通り学んでいた。そうした治療法の中には、催眠などを用いる例があることも知っている。個人差はあるが、催眠状態の患者になれば、かなり複雑で、且つ強力な暗示を掛けることができるのである。

もつとも、あくまで現時点での仮説に過ぎないが。

「……ターナさんの『症状』に一番近いのは、ステイプルトン家のメイドだ。歩行の癖や口数の減少など、類似点が多い。そして……おそらくアイリーン嬢は、あの会場でターナさんが暗示にかかっていることを見抜いたんだ」

「おいおい。彼女がターナさんに会ったのは、依頼に訪れた一回だけだぞ？ それでどうして、そんなことがわかる？」

「ターナさんのことに詳しくなくとも、歩行の癖なら、ひと目見ればわかる。たとえば――その癖を元々知っていたなら、より確実にわかるはずだ」

「ま、待って？ じゃあまさか、お姉ちゃんの暗示って、あの人が……あ、でも、それならわざわざ忠告するはずがないか」

「その通りだ。もちろん、単なる善意からの忠告か、他に狙いがあるのかはわからないが……」
アーサーはそう答えながら、屋敷の使用人たちを念入りに観察し続ける。

「とにかく、あの人物――ターナさんの独白が正しいなら、アイリーン・ドイルは、《ロンドン・キャット・コンテスト》の会場に出現した。そのコンテストには、基本的に表に出てこないはずの大物銀行家が参加し、しかもグランプリを獲得した。これで終わりのはずがない。なら、ステイプルトン家のおきのように、この屋敷の使用人の中に、暗示をかけられている者がいてもおかしくない」

「なるほど……それで？ 怪しい奴は見つかったのか？」

「あのな。動かず喋らずでわかるわけがないだろ。壁際なら絨毯もないし、せめて歩いてくれれば……コナン。君、あの使用人たちと、追いかけてみてもしてみたくないか」

「断る」

「ていうか、アーサー君、そんなのよくわかるね？ お姉ちゃんのおきもだけど、足音がしなかったのに、ドアの向こうにいるのがわかってみたいだし」

言われてみれば、ステイプルトン家のメイドのときも、アーサーは彼女が姿を見せる前に、彼女の存在に気付いていた。気配を殺していたのなら、かえって察知するのは困難なはずだ。

すると、マリーの疑問を聞いたアーサーは、彼があまり見せない種類の仏頂面になって唇を曲げた。

「……子供のころから、散々悪質な悪戯を受けてきたからな。下手に気配を消される方が、敏

感になるんだ」

「悪戯って……逆だろ？ お前がしてたんだろ？」

「なんと言う不当な侮辱だ。僕は子供のころからずっと、純真無垢な優等生だった」

「その発言の時点で信用度はゼロだが、なら、誰がお前に悪戯なんか仕掛けてたんだ」

「誰だって良いだろつ。実家の話だ！ ……とにかく、使用人の方の確認は、隙を見つけて仕掛けてみるさ。それに、本命は『このあと』だ。銀助には悪いが、可能な限り面会を長引かせて――」

アーサーがそう言って、強引に話を打ち切ろうとしたときだ。

広間に年配の使用人が入って来て、メリーウエザーの側に歩み寄った。

「ご主人様。《愛猫組合》の方々がお見えです。昨日のコンテストの件で、取材をしたいと」

その報告を耳にしたアーサーが、「おっと」と小さく笑みを浮かべる。その笑みを見るだけでも彼のさっきの話の信憑性が失われる、悪戯小僧の如き笑みだ。

「思いの外、早かったな。さて『猫』の飼い主たちの顔を拝むとしようか。賭けてもいいが、昨日会場にいた組合員たちより、刺激的な面々のはずだ」

*

「想定外だ。今回は出直そう」

メリーウエザー邸の前で停車した四輪馬車ランドの中。見張らせていた部下からの報告を受けた男は、即座に判断を下した。

しかし、男の向かい側に座る人物は、困るどころか嬉しそうな顔をした。

ほんの少しの間黙考したのち、

「……いや。良い機会だ。会場で見かけたときから予感があった。ただ、相棒の彼も一緒だろう？ できれば二人きりで会いたいな」

案の定な反応に、部下たちは頭を抱え、あるいは肩を竦める。

出直すよう進言した男は、ひと際大きく嘆息した。

「あんたが現場に出ると、ろくなことがない」

男の愚痴に、その人物は「不本意だな」と笑う。

長い髪をなびかせたのち、

「つまらない『牽制』が、実に楽しげな『余興』になった。来たまえ、大佐。《沈黙館》が気付かぬ内に、猫屋敷でひと暴れだ」

*